

## □ 広田教授

おっしゃるとおりです。実際にやってみれば、中には自分たちでは解決できない課題もあるでしょう。でも、気が付いた課題を行政に正しく伝えて、行政と「これからどうしていきましょう」という話ができれば、それも一つの達成感になるのではないのでしょうか。これが「市民協働」の第一歩にもなると思います。こういった実践経験を積み重ねて、自分たちでできることを増やしていくことで、より長期的な視点での取り組みにもつながっていくと思います。

## Chapter 2 なぜ今、地域づくり

### ■ 遠藤市長

なぜ今、地域づくりが必要なのかでしょうか。先生の考えを聞かせてください。

### □ 広田教授

今、全国的に人口減少、特に若者世代の減少が地域の大きな課題となっています。久慈市でも2040年までに人口が1万人以上減少するという試算を出しています。人口規模が縮小すれば、地域経済も立ち行

かなくなり、今ある地域コミュニティが維持できなくなれば皆さんの生活さえ成り立たなくなる可能性があります。自分の住む地域の生活基盤を維持していくためにも、今こそ「腹を括って」地域づくりに取り組まなければいけないと思っています。

ひとつ知っておいていただきたいのが、「行政に要求すればなんとかなった」という時代は、戦後の一時期だけの話ということです。歴史をさかのぼれば、戦前は地域の主体性というものが今よりもずっと強く、地域でお金を出し合って学校を建てたり、診療所に医者を迎えてきたりしていた訳です。

ところが、戦後の高度経済成長期に行政が力をつけ、市民サービスを展開できるようになりました。いわゆる「ゆりかごから墓場まで」という考え方で、地域の整備も行政主導が進められてきました。実際にそれが有効に機能していたのは、経済的に余裕があった限られた時期だけだったんですが、その時代を過ぎた人にとっては、どうしてもそれが「当たり前」という意識があります。本来は地域の住民が担うべき仕事も行政が担ってくれた、という非常に幸福な時期を偶然過ごしてきただけで、歴史的に見ても自分

たちの生活、自分たちの地域を自分たちで守るとするのはごく当たり前のことなんです。だから、今になって住民の主体的な「地域づくり」が必要となっているというよりは、行政依存だったものが本来の姿に戻っただけなんだともいえると思います。

### ■ 遠藤市長

市内でもいくつかの地域で市民協働の動きが出てきています。地域から「こんな地域を作りたい」という声があがり、一緒に動いてくれる人たちが出てきてくれたら、久慈市の力は今よりもずっと強いものになると思っています。

### □ 広田教授

私は、住民から受けた要望を行政がそのまま実行するのではなく、「まずはみなさんで解決できる場所は解決しましょう。それに対して行政も支援します」という姿勢が必要だと思います。課題自体を解決するのはなく、住民が自分たちで解決するプロセスをサポートするというスタンスが必要だということです。

いわば「魚を取ってあげるのではなく、魚の取り方を教えてあげる」というのが協働の第一歩。一度経験すれば、次からは自分たちでできるようになります。そうすれば行政の

いています。

公民館を拠点として設定した理由は、何かしようといったときに住民が集まれる範囲内であることや、これまで公民館で実施してきた社会教育事業などで住民にとつてもなじみがあることが挙げられます。また、公民館を実践の拠点となる施設として利用できるというハード面でのメリットもあると考えられます。

### □ 広田教授

小学校区単位や公民館単位など、複数の集落・町内会をまとめた広域の「大きなコミュニティ」で地域づくりを進める理由はほかにもあります。まず、近年は「公共交通」や「子育て環境・学校」をどうするかといった、個別の集落単位・町内会単位などの「小さなコミュニティ」では解決できないような課題が出てきていることが挙げられます。また、人口減少や高齢化などで小さなコミュニティではマンパワーが不足し、課題に対応しきれなくなってきたという実態もあり、広域化することで活動に必要なマンパワーを確保したいという狙いもあります。

集落の草刈りや清掃、お互いの見守り活動など生活に根差した支えあい、これからも「小さなコミュニティ」が担うべき役割だと思います。

負担も減り、別の課題解決に取り組むこともできるはずですよ。

### ■ 遠藤市長

現在の地方自治の仕組みでは、市が自分たちで決定権を持つというのは難しく、どうしても国や県にお願いをする、という流れになってしまいがちです。でも我々も「こんな久慈市を作っていきたい」という思いは、しっかりと持って取り組んでいくつもりです。「誰かが何とかしてくれる」でなく、自分たちで取り組んでいく姿勢、「自分たちで変えられるんだ」という考えが、多くの人たち、特に若い世代や女性などにも広がっていくことで、地域全体が変わっていくと考えています。

一方で、例えば「特産品を開発しよう」「観光メニューをつくろう」といった「攻めの地域づくり活動」をしようと思った場合、「小さなコミュニティ」では実現が困難で、「大きなコミュニティ」で取り組む必要があります。

### ■ 遠藤市長

市内では、公民館の対象地区の町内会や体育協会・PTAなど各種団体が集まり「まちづくり協議会」などの組織を作っている地区もあります。まちづくり協議会のある地区は「大きなコミュニティ」として協議会の活動がより充実するように、ない地区は「大きなコミュニティ」を組織できるように、サポートをしていきたいと思っています。

また、来年度からは公民館を「市民センター」に変更します。「公民館のままでもいいんじゃないか」という声もありましたが、私は「なぜ市民センターなのか」ということを投げかけたのです。市民センターは地域の人たちの実践活動の場であり「ここを拠点に地域づくりを進めていくことで、地域に活力があふれる久慈市に変えていきたい」というメッセージを住民の皆さんに伝えていきたいと思っています。

◀ふるさと未来づくり事業から生まれた山根食チーム。べっぴんカフェの企画や巡回公民館の昼食づくりなど、これまでにない取り組みにもつながっています



## Chapter 3 地域づくりの実践

### ■ 遠藤市長

市では、概ね旧村ごとに設置されている市立公民館を核とした地域コミュニティの活性化を目指して、昨年度から「ふるさと未来づくり事業」に取り組んでおり、広田先生には、この事業をサポートしていただ



山根町で実施した地域の宝さがし▶